
魔法少女リリカルなのは～優しさと欲望とメダル～

ハンダごて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜優しさと欲望とメダル〜

【Nコード】

N8906T

【作者名】

ハンダごて

【あらすじ】

世界を超えて欲望を求めた一人の人間。

彼は仮面ライダーオーズだった。

しかし、超えた世界に來たとたんメダルを落としてしまう。

プロローグ（前書き）

リリカルなのはと、仮面ライダーオーズのコラボ作品。
文に表すのは苦手だが頑張ります。

プロローグ

ある日の夜。

とある世界で、異次元の扉が開こうとしていた。

とてつもなく強い力がぶつかり合い、あたり一面に火花が散っている。

そしてついに、その扉が開かれた。空が割れ強い光が漆黒の夜の中に放たれる。

やがて光は治まるがそこには一人の少年がいた。

少年は浮いておりそのまま周りを見渡す。

「なるほど。これがすべてのメダルが集まった力か。

すごいね、これは……」

「この世界も欲望が溢れてるな。まあ、人間は非常に欲深い生き物だ。不思議もなんともないな。」

そう言う少年は手の中にあつたメダルを見つめた。

「さて、この世界の欲望はどれほどのものなのかな。」

おもむろにメダルを動かしていると、何か気の流れが変わったような感じが辺りをつつんだ。

「ん……？何か変だね……」

少年はどこから取り出したのか、変な形をした四角い細長いものを腰に当てた。

すると、何か細長いものからベルトの様なものが腰に巻きついた。
そして、手の中にあるメダルを

カシヤッ カシヤッ

三ヶ所あいている所に

カシヤッ

入れる。

中央の部分を斜めにとすると、右側にある円盤を手につ。
そしてメダルを入れたところで横にスライドさせた。

キンッ キンッ キンッ

「変身！」

『タカ！ トラ！ バッタ！』

『タ・ト・バ！ タトバ！ タ・ト・バ！』

何らかの歌が聞こえ、少年の姿が変わった。

それは、神々しくそびえ立つ戦士の様に見える。

胸にある紋章は、上から、鳥・獣・虫と分かれていた。

先に出していた歌の通りならば、たか、とら、ばった、となるのだ
ろう。

「さて、何が来るのか……」

彼はそのまま身構えた。

そして、場面は動いた。

ドゴーーーーンッ！！

「ぐうううつつ！！」

上から突然カミナリが襲ってきたのだ。

「があああああつつつ！！」

いまだにカミナリを浴び続ける少年。

やがて、バーンと何かが弾ける音が聞こえた。

それは、彼がカミナリによって弾き飛ばされた音なのだが、それだけではない。

「しまった！メダルが！」

彼から、メダルが何枚も溢れ出した音も混じっていたのだ。

無数のメダルが夜の街の中へ消えていく。

そして、彼もまた一緒に落ちて行った。

糸が切れた人形のように抗う事もなく、ただただ落ちていった。

プロローグ（後書き）

まあ、こんなもんです（――；）

お粗末様でした。

次はプロフィールを載せます。

第1話「始まりと目覚めと関西弁」 (前書き)

プロフィールを書こうと思ったけど、主人公の名前すらも出てきてないため無理だということに気がついた。(アホです)

今日の話は題名の通りあの子が出てきます。

第1話「始まりと目覚めと関西弁」

闇の中に光が見える。

（ん、寝てたのか？）

覚醒した頭が、今の今まで自分が眠ってしまっていたことを理解した。

そのまま目を開く。

「……天井？」

映ったのは天井。

どうやら家の中らしい。

（おかしいな。俺は家に入った覚えはない……それにベッドだと！
？何故こんなところで寝ていたのだ？）

まるで記憶にない場所で混乱する。

（まあ、落ち着け俺。まず、最後の記憶を思い出せ……）

思い出すのはあの世界での最後の戦い。

（そう。すべてのコアメダルを集め終わった俺はその力を使って別の世界へ跳んだんだ）

跳んできて、この世界の欲望の深さを知った。

（この世界でも欲望は絶える事はなかった。そりゃあそうさ。なにせ、欲望がなければ人は生きてはいけないからな）

あいつなら、「すばらしい!!」って言ってるところだな。

そしてすぐ後に…

「そうだ！俺はあん時に!!」

思い出したのは、カミナリに討たれた自分と弾き飛ばされたメダル。すぐに自分の中を調べる。

COUNT THE MEDALS

タカ

トラ

バツタ

「くそっ！無事だったのはドライバーに入ってた三枚だけか!!」

残りのメダルはおそらく、この街の中へ散らばったのだろう。

「ちくしょうっ！イライラする！なめんじゃねえぞ！」

すでに気付いていた。

あのカミナリは自然現象なんかではないことに。

雨なんか降っていなかったし、落ちてくるさいに微かに殺気を感じた。

間違いなくあれは何者かの攻撃だった。

「こんなところで寝てられねえ！はやくメダルを……」

ベッドから飛び起きて、ドアへ向かっていた時だった。

「ああ、やつぱり起きたんか？大きい声が聞こえるなと思うて……
ってあかんやん！まだ寝とらんと！」

一足早くにドアが開いて出てきたのは、車いすにすわった女^{ガキ}だった。

「ああん？」

何故、ここに女^{ガキ}がいるのかわからず思わず目が細まる。

「ううっ。そ、そんな恐い顔したってだめやで！頭打つとるんやから！」

「あたまあ？」

手をやると頭には包帯が巻かれていた。

おそらくこの女^{ガキ}がやったのだろう。

（ちっ、余計なことを……）

「でも驚いたで。すごい音がしたと思うたら、うちの庭に君が倒れておるんやもん」

「何!？」

ってことはこの女^{ガキ}に知られたということになる。

俺が普通の人間じゃないことに……

「最初は死んどるんかと思っただけど息しとるし、頭から血も出てたから家まで運んだんや」

だが、まるで怖がる様子もなく接してくる。

俺はこの女が不思議で仕方なかった。^{ガキ}

「でも、ほんと大変やったんやで、部屋まで運ぶのに一苦労したわ」

だが、この女は、俺の心境を知ってか知らずか、笑顔を絶やすことなく話しかけてくる。

何故だ？

「おい」

「ん？なんや〜？」

「お前、俺が怖くないのか？」

だから、俺は聞いてみることにした。

「思わへんよ。だって、今は怖い顔してへんもん」

「い、いやそうじゃなくて、お前の庭で倒れてたんだぞ！もつとこ
う、変だなとか、不気味だなとか、何かあるんじゃないのとか、な
いのか！？」

「ん〜、特には……」

な、なんだこいつは？
ぬけてるのか、バカなのか。

とにかく俺が初めてあうタイプの人間だということはわかった。

「でも、なんかわけありって事はわかったわ」

「だったら、そのわけを聞こうとは思わないのか？」

「だって、聞いても答えてくれへんやろ」

まあ、確かに正論だな。

なんかムカつくが……。

「それに、お客さんにそんな失礼なこと聞けへんよ」

「き、客？」

まるで予想してなかった言葉に思わず口に出してしまう。

「せや。どんな理由でも、うちの門をくぐった人はお客さんや」

「……」

開いた口がふさがらないとはこのことだろう。

鏡を見れば、面白く、情けないだろう俺の顔が写っているだろう。

「はあ……もう勝手にしろ」

この女と話している^{ガキ}と疲れるだけだ。

「うん。勝手にするわ」

イラつく。

だが、不思議と落ち着くのは、気のせいだと信じたい。

第1話「始まりと目覚めと関西弁」（後書き）

なんか、はやてがいい人すぎたかな？
でもいいか、はやてだもん。

第2話「名前と名前とイライラ」（前書き）

はやてファンの皆さんごめんなさい＞（――）＜

はやてが、めっちゃくちや罵声を浴びせかけられます。

すみません。うちの子はツンデレなもので。

第2話「名前と名前とイライラ」

同時刻

「ところできみの名前はなんて言うんや？」

「……」

「ん？なあ？もしもし」

「……（イラッ！）」

「聞こえてるやろ？もしもし」

「……（イライラッ！！）」

「もしもし」

もう限界だった。

「（ブチッ！）うるせえな！女^{ガキ}！！」

「ガキやないで！うちは、八神はやてや！」

「聞いてねーよ、女^{ガキ}！くそ女^{ガキ}！」

もはや子供のケンカである。

「うう、ガキ、ガキ言うて、君のほうこそガキやないか！」

「んああ？　どうということよ？」

まるでわからない言葉を言われたみたいだ。
誰が男^{ガキ}だって？

「どうということって？　見たままの意味やけど？」

見たままの？……ま、まさか！

「おいっ！　鏡はあるか！」

「え？　なんや急に？」

「いいから早くしろっ！」

「うう、わかった。持ってくるわ」

少年の凄みに負けたのか、はやては、すごすごと部屋をでる。
少したつと、はやては、戻って来た。

「手鏡しかないけど……」

「かせ！」

強引に奪うと、すぐに鏡を覗き込む。
そこに写っていたのは……。

「なん……だと……」

10歳程度の子供の姿だった。

（お、おかしい！何がどうなってる！？何故男の姿に！？^{ガキ}）

だがすぐに理由^{わけ}がわかった。

（そうか！あのコアメダルが、無くなったから……俺の欲望を移したあのメダルが……）

目の前が真っ黒になった様な感じがする。

「あ、あの？大丈夫なん？」

崩れるように膝をついた少年を心配してか、はやては顔を覗き込んだ。

「燃え尽きたぜ……真っ白に……」

「あかん、灰になっとる！どないしよう……」

「もう、パーフェクトも、ハーモニーもないんだよ……」

「あかん！どんどんやさぐれとる！」

みるみるうちに沈んで行く少年に、はやては、おろおろするばかりだ。

わたわたと、腕を動かしていたためか、はやての上着のポケットから何かがこぼれ落ちた。

チャリーンッ

「ん？」

その音で我に帰った少年が、その音の先を辿ると……。

「こ、これは……」

薄い黄緑色をした、大きめなメダルが落ちていた。

真ん中には、カマキリの絵が彫られている。

「ああ、これな。君が倒れてたそばに落ちてたんや。メダルみたいやったけど、何に使うのかわからなくてな。でも一樣、拾っておいたんや」

それを見た少年の動きは早かった。

「それを寄越せ!!」

しかし、はやての動きはそれより早かった。

はやては、素早く車いすを動かし、下にメダルを隠してしまう。

「どけ!!」

「んゝ、どないしようかなゝ」

「てめえ……」

目がつり上がり、怒りをあらわにする少年。

しかし、はやては、その怒りを受け流すようにほくそ笑んだ。

「どいてもええけど、うちのお願ひ聞いてくれるか？」

「お願ひ？」

「せや」

氣にくわない。

氣にくわないがメダルのためだ。

「ちっ、豆狸が。なんだよ」

少年は、はやてに聞いた。

（やはり、この女も欲望にまみれてるってことか。金か？物か？まあ、どれも欲望にはかわらないな……）

そんなことを考えていると、あいつの口が再び開く。

「あのな……うちのこと、名前でよんで」

「は？……名前？」

拍子抜けな内容だった。

「うん名前や。ずっと、ガキ呼ばわりで寂しいやん。だから名前で呼んでや」

……

「そ、それだけか？」

「せや」

「金は？」

「別にいらん。生活るぶんはあるし」

「物は？」

「特にないな。あ、しいて言えば本やな。でもそれは図書館で借りれるし」

「……」

信じられなかった。

この女は、あまりにも欲がなかったのだから。
でも名前か……。

「ふんっ。たいした欲望だよ」

俺はただ嫌みを言うことしかできなかった。

「……はやて」

非常に不愉快だが、俺はあいつの名前を口に出す。

「えへへ、なんや……」

急に口を閉じたのが気になったが、今はメダルだ。

「これでいいだろ。早くどけ」

だがしかし。

「だめや！もう一つ重要なこと忘れてたわ！」

「何っ！」

こいつ！足元見やがって……！

「いいかげんに……」

俺の怒りも限界だ。

だったらこいつを力ずくで……

「名前をおしえて」

「はあ？」

また名前かよ。

「うちも、きみのこと、『きみ』しか言ってへんもん。だから教えてや、君の名前」

「……」

「だめ、かな……」

「……」

じつと、あいつは俺の目を見る。

自然と、俺もあいつの目を見る形になるが、すぐに目をそらす。それが何か負けた様な感じがしてムカついた。

「……はあ……鷹ノ目たかのめ 映司えいじだ」

それを聞いたはやては、溢れるばかりの笑顔を浮かべた。

「うん映司君な。よろしくな」

「馴れ馴れしくすんなアホ」

ほんとに、こいつはイライラさせるのが得意なやつだ。だが、不思議と悪い気はしなかった。

第2話「名前と名前とイライラ」(後書き)

COUNT THE MEDALS

タカ

トラ

バッタ

NEW

カマキリ

プロフィール・裏話(前書き)

やっとプロフィールです。

お待たせしました。

……え、待ってない(^| ^;)

プロフィール・裏話

主人公…鷹ノ目映司たかのめえいじ

年齢…？（見た目は10歳くらい）

リリカルなのはの世界へ来た仮面ライダーオーズ。

すべてのメダルを集め終えており、莫大な力を手に入れている。

しかし、なのはの世界に来てすぐに何者かの攻撃に遭い、オーズドライバーに挿入していた三枚のメダル以外を紛失した。

現在は、八神はやての家に居候している。

性格はぶっきらぼうで攻撃的。

しかし、本当は優しい。（人それを、ツンデレと言う）

欲望に貪欲だが好みがあり、自分が認めない欲望からでたセルメダルにはまるで興味が無い。

現在使えるコアメダルは、

オーズドライバーに入っていた

タカ

トラ

バッタ

と、

はやての庭に落ちていた

カマキリ

がある。

裏話

鷹ノ目映司。

あれだけ強調していればわかりますよね。
元ネタは、アंकと映司の名前です。

実は、当初の主人公は、映司君ではなく転生者と言う設定でした。
しかし、これは他の作品に、似たり寄ったり（^―^；）
と思ったので予定変更。

世界を越えてきたヒーローということに。

性格も大幅に変更しました。

本来は、丸々映司の性格を移していました。
でもそうすると、「アंकの名前が浮きすぎ（――；）」
じゃあ足して二で割るとどうだろう？

それが、鷹ノ目映司君なのです。

でも、出来たらただのツンデレだったぜ（^^）b？
という落ちに……。アリサもびっくりだ。

まあ、まだ話せば長い裏話もあるけども、ここで全部話しては面白くない。

徐々に話していききたいと思っています。

では、次は第三話でお楽しみください。

プロフィール・裏話（後書き）

次の投稿は少し間が空くかもです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8906t/>

魔法少女リリカルなのは～優しさと欲望とメダル～

2011年10月9日07時36分発行